

仏の願い

平成 27 年 西雲寺だより 冬号（44 号）



当山

御正忌報恩講の

ご案内

11月28日(土)～30日(月)

28日お逮夜(2時)

お初夜(7時) (武周お講)

29日お日中(10時)

大逮夜(2時) (御伝鈔)

お初夜(7時) (御伝鈔)

30日満日中(10時)

法話 福井 野世信水師

(29日より)

お誘い合わせの上

ご参詣下さいますよう

ご案内いたします

御正忌に思う

木枯しが吹き、境内が黄色く色づいた。いつもの葉っぱでうまる頃、親鸞聖人の御正忌に当り御正忌報恩講がつとまる。九十年という長く厳しい人生を終えられた親鸞聖人を偲ぶにはふさわしい時節といえよう。やがて訪れる長い冬は、流罪の地、越後で五年間、布教の地関東で二十年間、厳しい冬を過ごされた聖人、及び家族のご苦労が偲ばれるのである。

ご正忌報恩講はやがて過ぎ去るこの一年を振り返ってみるよい機会といえよう。老・病・死する厳粛なこのいのちをしつかりと受け止めてきたのだろうか。

蓮如上人の『お文』のなかの厳しいおことばが思い起される。

つらつら人間のあだなる軀を案ずるに、生あるものはかならず死に帰し、さかなるものはついにおとろうるならひなり。さればただいたずらにあかし、いたずらにくらして年月をおくるばかりなり。これまことになげきてもなをかなしむべし

私たちは、老・病・死していく無常なるいのちを生きていながら、そのようなことにならなくふれないように目をそむけ、いつまでも健康で、若くありたいと願って、仏法にはなかなかこころがいかず一年が過ぎようとしているのです。このことを蓮如上人は「これまことになげきてもなをかなしむべし」といわれるのである。そして蓮如上人は、

すみやかに本願真実の他力信心をとりて、わが身の今度の報土往生を決定せしめんこそ、まことに聖人報恩講の懇志に、あいかなうべけれ

といわれ、私たち一人一人が、信心をとりて報土往生を決定することが御正忌報恩講を勤めるに当り、親鸞聖人に対して、報恩謝徳になるのだといわれるのです。そういわれても私たちは信心をとろうとか、浄土の往生する身になりたいと思うところが起こりません。

しかし、信心をとるということは、私自身はつきり確立するということではないでしょう。か。煩惱具足の迷いの凡夫よ、念仏申してわが浄土に生まれてくれと曠劫（こうこう）より呼びかけてやまない本願の聲が聞こえて、この私が迷いの凡夫として念仏申して浄土を願って生きる身に定まるのです。そしてここから私の新しい生き方が始まるのです。そのことが親鸞聖人から私たちに願われていることなのです。

安養の浄土はこいしからずさうろう

私たちも全くお念仏申し浄土を願うところが起こらないわけではありません。法話を聞いて深く領づいたときや、苦しいことや悲しいことに会って、今までの自分の思いが間に合わなくなつた時、思わずお念仏が出るのとがあります。しかしそれが長続きしないのです。関心が娑婆の方に向いてお念仏も出なくなるのです。『歎異抄』第九条には著者である唯円坊が同じような心境を親鸞聖人にお尋ねしています。

お念仏を称えましても、かつてのようにおどりが上がるような喜びが感じられないのはどうしてなのでしょう

この唯円坊の不審に対して聖人は「私（親鸞）も、このことが疑問でありました。唯円坊あなたも同じ疑問をもたれていたのです。喜びはずのこころを喜ばせないようにしているのは、煩惱がはたらくからです。喜びのこころが起こらないからこそ、よりいっそう弥陀の浄土への往生は間違いないといたたくべきでしょう」応えておられます。聖人と唯円坊との温かい師弟関係がいただけれます。そして最後の方にこのように述べておられます。

久遠劫（くおんこう）よりいままで流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだうまれさる安養の浄土はこいしからずさうろうこと、まことに、よくよく煩惱の興盛（こうじょう）にさうろうにこそ。なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり、いそぎまいりたきこころなきものを、ことにあわれみたもうなり

「久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里はすてがたく」とは、娑婆に対する執着をいっているのではなく、如来の願心が曠劫以来の流転の身とともに歩んでくださっていることを深々といただいているのです。「娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり」とは大きな如来のはからいにすべてをまかせ切った心境を述べておられるのです。

（住職）

みようこうにん
妙好人の歌

浄土真宗は多くの妙好人を生み出してきました。妙好人とは在家の念仏者で、特に教養や知識がなくても、生活のなかから深くお念仏を喜ばれた方です。その妙好人の一人、島根県の浅原才市（あさはらさいち）さんの歌を紹介します

仏のこころは 不思議なものよ

ねるも仏

めにめえねど 話ができる

おきるも仏

仏と話をするとき

さめるも仏

称名念仏 これがはなしよ

さめてうやまう

なむあみだぶつ

わたしや しゃわせ

むねに六字のこゑがする

死なずに参る

おやのよびごえ

生きさせて参る浄土が

慈悲のさいそく

なむあみだぶつ

なむあみだぶつ

死ぬことがいやなら

世界に自力わなし

いただきなせれ

わが心こそ 自力なり

なむあみだぶつは死ぬることなし

自力が他力にしてもろて

なむあみだぶつ

いまは あなたと もうす念仏

姿形は凡夫でも

なむあみだぶつと居る凡夫

わたしのうたがい 海より深い

わたしのうたがい 山より高い

わたしのうたがい 世界のごとく

それにお慈悲がくつついて

くださるお慈悲が なむあみだぶつ

ごおんうれしや なむあみだぶつ

わたしのちちおや 八十四歳

往生しました お浄土さまに

わたしのははおや 八十三で

往生しました お浄土さまに

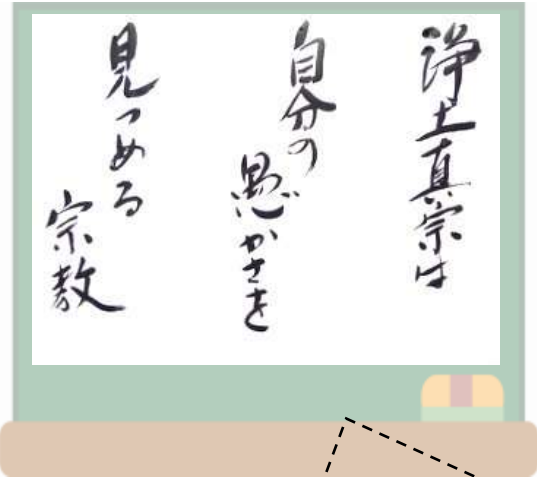
わしもいきます やがてのほどに

親子三人 もろとも

衆生さいどの 身とはなる

ごおんうれしや なむあみだぶつ

山門揭示板



今日の世界を見れば、内戦あり、テロあり、毎日のように尊いのが失われている。そして世界を支配しているのはお金である。お金の大国が貧しい国を従えている。そのようなすがたを見るにつけ、人間というもののものはどれだけ賢くなっても、愚かなものであるとつくづく思う。世間は我身を照らし出す鏡とも言われるけれども、自分自身が愚かだとは気づかない。人間の愚かさとは『正信偈』のなかにある「邪見憍慢悪衆生」とある邪見憍慢（じゃけんきょうまん）ということであろう。邪見とは我身を常によしとして、他を批判し、自己を問い直すことのない人である。このことが他を傷つけ自分をも傷つけていることに気がつかないのである。浄土真宗は聞法によつて自分の愚かさを見つめる教えである。しかし、自分の愚かさを知らされるためには自我が破れるのだろうか。破れないことを知らされたい私の自我が破れるのだろうか。破れないことを知らされて頭が下がるのではないだろうか。（住職）

私はもう何もできなくなり、家族に一から十まで世話になり、感謝の日々を送らせていただいています。（いただいたお手紙より）

み仏にまかせて生きよう 老いし身を

平成二十七年十月二十日

清水 幸子

発行

真宗仏光寺派 専念山

さい うん じ
西 雲 寺

住職 護城一寿

筆頭総代 吉川芳弘

編集責任者 護城一哉

〒910-3523 福井市武周町5-2

電話 0776-97-2138

メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp

次世代の方、分家された方に！

お手元に2部届いた時には、ぜひご活用下さい。

みなさんの声 大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。